

「私と国際頭痛学会」



埼玉精神神経センター/埼玉国際頭痛センター長
坂井文彦

第1回国際頭痛学会は1983年にミュンヘンで開催された。日本からは「頭痛懇談会」（会長・喜多村幸一 東京女子医大脑外科教授）の会員が参加している。世界の頭痛研究黎明期に、日本でも頭痛懇談会（頭痛学会の前身）が活動していたことは特筆すべきである。日本の頭痛研究は「脳の研究」として、神経内科医と脳神経外科医が協力して始まった。私が国際頭痛学会に初めて参加したのはコペンハーゲンでの第2回学会で、日本からの参加者が口演、ポスター発表を行った。私が所属していた研究室のテーマは「脳血管反応性」であり、私の報告も「脳血管の自律神経調節が片頭痛の発症に関係する」であった。その学会では、Moskowitzが三叉神経血管説を華々しく展開し「血管説は単純すぎる」と、私には衝撃的であった。しかし、その後の私の研究には大きな刺激となった。その後2005年には日本（京都）で国際頭痛学会が開催され（図）、学会運営にも日本からの貢献度が増加した。ただ最近、

日本からの学会参加、研究発表が減少していることを心配する声が少くない。日本頭痛学会会員数は3,000人を超える、頭痛診療に意欲的な医師が増えているにもかかわらず、である。片頭痛治療の新薬



は片頭痛の負担軽減の武器になっている。しかし課題も多く、頭痛のメカニズム解明と治療学の発展のためにさらなる研究が望まれている。日本から脳の科学「頭痛」について、より多くの研究と報告があつてほしい。そのために、日本の頭痛専門医の多くが国際頭痛学会の会員となり、最先端の情報を常にフォローしてほしい。

学会誌の論文の情報量に負担を感じる必要はない。すべての論文の①タイトル（タイトルだけで論文の概略がつかめるものも増えている）と②conclusionを先ずみる。興味があった論文のみ、③abstract, ④discussion, ⑤introduction, ⑥methods, ⑦resultsも読む。恩師、後藤文男教授からの伝授である。